

「リサイクル活動を通して」 —保護者の姿から物の大切さを知る—

東京都文京区立千駄木幼稚園園長 徳永静江

事例の 位置付け	実施学年	2・3年保育5歳児
	教科等	
	単元名	生活のなかでリサイクルできるものがあることを知る。

ねらい

- 1 保護者が行う「資源回収」の話を聞いたり、話し合ったりする。
- 2 自分たちにもできる物のリサイクルがあることに気づかせる。
- 3 遊びや生活のなかで、物を大切にすることを促す。

展開の特色

- 1 5歳児は、遊びや生活の場を整えたり、作り出したりすることが活発になる。
- 2 人への関心が広がり、園内で保護者が活動している様子や、地域で見聞きしたことなど学級のなかで共通の話題にすることができる。
- 3 物やお金に不自由を感じることなく生活できる今、あえて物を大切に扱うことに気づかせたり、リサイクルしたりする生活を知らせていくことが必要である。
- 4 保護者の資源回収の活動が幼児にとって、目に見える形でよい刺激となっている。

構成

- 第1次 園庭で全園児が学年ごとに「一日動物村」の小動物と触れ合う。
- 第2次 保育室で「一日動物村」の体験を話し合う。その際、保護者の資源回収活動で費用をまかなっていることについて話をしする。
- 第3次 自分たちにもできるリサイクルについて関心をもたせ、使いかけの紙も大切に扱うように指導をする。

本時の展開

一日動物村が終わった時、「あの動物たちは、お母さんたちが資源回収をしてくれたお金でできたの」と幼児に話をしする。「10万円もしたの」と言うと「えー！」と驚く。「資源回収で集めた紙は、きれいに洗って機械にかけて、また紙になるのよ」と伝える。そこで、「もやせるごみ」「もやせないごみ」の表示が付いている保育室のごみ箱を見せながら、ごみの分類について再確認をする。また、「しろいかみ」「いろのかみ」と名刺大の表示を付けたリサイクルかごを見せて、「みんなもお母さんのお手伝いができるのよ、この紙よりも大きいしろい紙は、魔法の機械でまた白い紙ができるんだって」と話す。描きかけの紙を見せながら、「この紙は、半分も使っていない所があるけれど、どうしたらいいかしら？」と投げかけると「まだ使えるよ」と答える。「そうだね、こういうのは、リサイクルの箱にもどそうね、捨てたらもったいないよね」と受け止める。

翌日以降、遊んだ後の片付けになると「先生、これはまだ使える？」「これはリサイクルだよ」と確かめる姿が見られる。また、「使えそうな紙が捨ててあったよ」とごみ箱から拾ってきたり、使いかけの紙を細かく分けたりして、物を大事にしようとする姿が多く見られるようになる。

その他 — 考察

- 1 幼児が経験していること
 - ・お母さんたちが協力し合ってお金を貯め、自分たちのために使ってくれているうれしさや、ごみと捨てた物がお金に代わる価値のあるものだということが分かる。
 - ・今まであまり意識せずにごみとして捨てていた紙を、集めるとリサイクルできることを知る。
 - ・リサイクルできる紙の大きさがあることが分かり、大きさを比べたり、考え合ったりする。
- 2 環境構成
 - ・ごみの分類を習慣化するために、ごみ箱やリサイクル箱を取り付け、可燃・不燃やリサイクルの分類が分かりやすく行えるよう、表示する。
 - ・幼児が意識しやすいよう、リサイクル箱をあまり大きくしないで、中を見えやすくする。
 - ・一日に回収する量を分かりやすくするために、毎日箱を空の状態にする。
- 3 教師の援助
 - ・言葉の説明とともに、教師が行動で示したことが、幼児のモデルになっている。幼児は、教師の何気ない言動も見ていたので、常に、「もったいない」と意識した言動を心がけることが大切である。
 - ・ごみを減らし、森林など自然環境を守ることの大切さについても、折にふれて話し、リサイクルの大切さを意識づけていく。
- 4 金銭教育を進めていくための視点
 - ・常に、リサイクルについて細やかな対応をしていながら、幼児の意識が高まるようにしていく。
 - ・幼児が生活のなかで、リサイクルについての関心や意識をもち続けることができるように、無駄なく処理しやすい方法を工夫する。
 - ・資源には限りがあることを幼児にも分かる範囲で伝え、家庭でもリサイクルの精神が活かされていくように指導していく。
 - ・教師自身が資源を守り、グリーンコンシューマー（環境に負荷をかけないように配慮しながら生活をおくる人）としての感覚を磨き、実践することが大切である。



PTAによる熱心な資源回収活動